慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	我が古代語と琉球語との比較
Sub Title	
Author	宮良, 當壯(Miyanaga, Masamori)
Publisher	三田史学会
Publication year	1924
Jtitle	史学 Vol.3, No.3 (1924. 9) ,p.51(394)- 89(432)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19240900-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

我が古代語と琉球語との比較

（一）

世間には動もすれば、琉球語を支那語や馬來語などと同系のものであると誤解してゐる者がある。甚だしきに至つては「てにをは」が存しないなどと途轍もないことをいふ者さへある。笑止の限りである。

琉球語はどこから觀ても國語と離して考へることは出來ない。稀に意義不明のものがあつても、これはまだ研究の足りない結果で、研究すれば其の多くは矢張り國語と同じ出發點を有するものである。日本語の系統は、南方は薩南奄美群島を經て琉球諸島に至り、八重山群島中の最南端なる波照間島、最西端なる與那國島に至つて盡きてゐる。紅頭嶼及び臺灣より彼方は全然系統を異にして、支那若しくは馬來系をなすものである。而して琉球語は國語と同じく朝鮮語に極めて密接なる關係を有し、わが日本民族の發展經路を、この三種の語の比較研究に依つて暗示するものがある。わが日本に於て大陸と接觸することの多き千島海峽間宮海峽、朝鮮海峽、臺灣海峽等は言語學上に於ても後來餘程注意すべき所であると思ふ。

言語は民族の文化生活と共に發達變化する活物であるから、古代の言語、必らずしも今日のものでない。其の環境の影響を受けて變遷することが多い。それ故、中世に至つて政治的に支那と交渉

の繁しかつた沖繩本島（首里、那覇など）の言語は支那の影響を蒙むることが多く、又奄美群島の言語は薩摩と甚だしく接近したやうである。然るにひとり、宮古及び八重山の先島諸島は沖繩本島に遠くして（二百四十六浬）、舟楫の便も乏しく、臺灣近し（約九十浬）と雖も、人食ひ島と稱して恐れ近かず。故に絶海に僻在して唯だ農耕を樂しみ、これに依つて生活の道を營んだのである。彼等は本來からいへば、海に親しんで漁獲に從ふべきであるのに、漁夫を蔑視して若草の萌ゆる小島の平原に培ふのみであつた。而して稀に山幸海幸を獲得するために半ば遊興的氣分で海山へ出掛けたのである。これに依つて觀ても彼等の先祖は太古よりこの島に居たのではなく、長い年月を要して大陸から徐々と移住して來て、彼等に斯る農本生活の道を授けたことが分るであらう。

（二）

元來、琉球には特別の文字がなかつた。漢字及び假名を併用して來たのである。その結果は記法が亂れて正鵠を期することが出來なかつた。例へばいはひ（祝）を「ユハヒ」、「ユワヘ」、「ユヱ」、「ヨハヒ」、「ヨイ」などと色々に記してゐる。尤も琉球には五十餘りの島があるが、その中でも又言葉は色々に變つてゐる。甚だしい一例を擧げて見ると平得（ひらえ）と眞榮里（まえざと）とは五尺ばかりの道を隔てた村であるが、前の家と後の家とで言葉が違ふのである。例へば

普通語――何處へいらつしやいますか。
沖繩語――マー　カイ　メンセーガ
八重山標準語――ジィマ　カイドゥ　オーリャ
平得言葉――ジィマ　ゲードゥ　オーリャ
眞榮里言葉――ジィマ　ハドゥ　オーリバ

の如きである。斯くの如く錯綜せる言語を普通の假名及び漢字にて寫し出すことは甚だ困難なことである。それ故、予は成可く其の發音通りの語を寫す爲めに、萬國音聲學會（International Phonetic Association）で制定した音標文字（Phonetic alphabet）を用ひ、それに分り易く假名を以て其の近似音を表はすことにした。

八重山語の方は既に音表まで出來てゐるから記載するのに非常に便利になつてゐる（詳しいことは國學院雜誌第廿九卷第七、第八、第九號を參照して貰ひたい）。今簡單にこれを述べて見ると、國語に於ては母音はア（a）、イ（i）、ウ（u）、エ（e）、オ（o）の五つであるが、八重山では尙ほこの外にイィ（ï）とエェ（ɛ）の二つを加へて七つである。而して第二段のイィと第五段のエとは拗音に用ひられ、第三段のイィと第六段のエェとは直音に用ひられる。例へば

カ（ka）　キィ(kï)　ク（ku）　ケェ(kɛ)　コ（ko）
キャ(k'a)　キ（k'i）　キュ(k'u)　ケ（k'e）　キョ(k'o)

サ（sa）　シィ(sï)　ス（su）　セェ(sɛ)　ソ（so）
シャ(s'a)　シ（s'i）　シュ(s'u)　セ（s'e）　ショ(s'o)

の如きで、國語に於てもシ（shi）、チ（chi）などは拗音と認められてゐる。國語に於ける五十音圖のタ行は錯雜してゐるが、八重山語に於ては整然として一糸亂れざる狀態にある。即ち

タ（ta）　○　トゥ(tu)　○　ト（to）
テャ(t'a)　ティ(t'ï)　テュ(t'u)　テ（t'e）　テョ(t'o)

ダ（da）　○　ドゥ(du)　○　ド（do）
デャ(d'a)　ディ(d'ï)　デュ(d'u)　デ（d'e）　デョ(d'o)

ツァ(tsa)　チィ(tsï)　ツ（tsu）　ツェ(tsɛ)　ツォ(tso)
チャ(ts'a)　チ（ts'i）　チュ(ts'u)　チェ(ts'e)　チョ(ts'o)

ザ（dza）　ジィ(dzï)　ズ（dzu）　ゼェ(dzɛ)　ゾ（dzo）
ジャ(dz'a)　ジ（dz'i）　ジュ(dz'u)　ゼ（dz'e）　ジョ(dz'o)

の如くで、ザはサの濁音ではなくて、ツァの濁音

になつてゐる。ヤ行及びワ行は其の子韻jとwにa、i、u、e、oの五母音を添へたものがある。又リィ、ピィ、ビィ等はr、p、bにiを添へた音である。フには屢々母音の無聲になるものがある。

尙ほこの外に百以上の發音の種類があるけれども茲には省略し、必要に應じて記すことにする。

（三）

ナイ（nai）――地震。琉球諸島全體に亘つて「ヂシン」とはいはずに「ナイ」といふ。尤も沖繩本島語では「ネー」といふが。併しこれは沖繩本島語に二重母音がないから轉化（ナイ――ネー）したのである。國語に於ても古く「ナ井」と記してゐるが、實際中國西國あたりでは今日矢張り「ナイ」といつてゐる。「地震のする」のを「ナイ●ユルン」といふ。「地震搖る」の義である。この語は又「寢返りを打つ」のにも用ひられてゐる。即ち「胴なゐす」（ドーナイシィン）である。

ミキ（神酒）をミシィといつてゐる。k音がs音に轉じるのはこの外にも例のあることで、例へばキク（聞）をシィクンと云ひ、キハダ（着肌）をシィハダといふなどがそれである。これはksiと發音してゐたものが、いつしかk音が脫落してsiとなつた爲めであらう。而してこれは吾々が今日用ひる酒ではない。今日の酒を神酒として用ひる場合には特にグシといふ。ゴシュ（御酒）の轉化したものである。そして「五水」と記してゐる。然らばミシィ（神酒）はどんなものであるか。これは神事のある二三日前に未婚の少女（既婚の婦人は汚れてゐるとする〻等が潔齋して多勢寄り集り、生米を嚙み碎いて之を甕の中へ吐き出して貯へ、一二夜の中に糖化せしめたものである。我が古代にも「大物主ノ釀（カミ）シ酒（ミキ）」などと酒を「かむ」

風習があつたのである。この「かむ」は米を嚙んで作ることを意味してゐるやうに思はれる。

正直ならざることをユクシィマといふが、よこしま（邪）の義である。それから僞ることをも「ユクシィ」といひ、活用語としてユクシィンといふ。即ち新撰字鏡に見える「與己須」はこれである。古事記傳にもよこし（讒）とある。動詞の「よこす」から出た名詞である。うそ（嘘。虚言）をユクシィ・ムニといひ、虚言者を「ユクシィ・ムニ・シャー」若くは「ユクセー」といつてゐる。「人言ノ讒（ヨコ）スヲ聞キテ玉鋒ノ道ニモ逢ハジト言ヘル吾妹子」といふ歌を見てもそぞろに古がなつかしい。

ひだるきこと（饑）、空腹なることを「ヤーサ」といふ。この語は「美しさ」といふが如く形容詞を作る名詞である。即ち「ヤーサー」といへば「ヤーサは」といふ意義で感嘆詞の「ひもじいなあ」といふ意味になり、「ヤーサーン」といへば「ヤーサある」の意義で形容詞の「ひもじ」、「ひだるし」の意味になる。更に活用語に用ゐる場合には（爲）の意義の「シィン」を添へて「ヤーサ・シィン」といふ。「やはさす」即ち「飢う」といふことである。偖て日本書紀の四神出生の章中、第四の一書を見ると「又飢時生兒號二倉稻魂命一」とあり。「ヤーサ」は即ち「ヤハサ」（ヤハシカリシトキウメルミコヲスウカノミタマノ）である。

「脱糞する」をフシュ・マルンといふが、「送糞此云二倶蘇摩屢一」に徴して見ても直にうなづかれることである。古事記には「屎麻理散」と見え、萬葉集には「屎遠くマレ、櫛造る刀自」と見え、竹取物語には「燕のマリ置ける古屎を握り給へるなりけり」といつてある。現今筑前、土佐などにも用ひてゐるといふ。

小便をシィバリィといふが、古語の「ゆまり」、「ゆばり」、「いばり（尿）」の義である。膀胱をシィバリィ・チィチィン即ちいばりつつみ（尿包）とい

つてゐる。和名抄の「由波利布久路(尿袋)」に對比すれば面白い。寢小便をユー・シィバリィといひ、「夜尿(よいばり)」の義。「寢小便をする者」には「ユー・シィバレー」といふ。「よいばりする者」の義である。

屁(へ)は笛と同じく「ピー」といつて擬聲語である放屁するのを「ピー・プスン」といふ。「へ・ひる」の義である。

琉球の便所は屋外に在つて養豚所を兼ねてゐる。石を築き廻した室である。之を「フリャー」といつてゐる。「クール・ヤー」の約で、「クール」は四周の圍まれたる室、即ちむろ(室)である。風呂(ふろ)の語源は或はこれでなからうか。風呂屋を「ユー・フル・ヤー」といふが、湯風呂屋即ち湯室(ゆむろ)屋(や)の義であらう。琉球の便所が斯く屋外に在るが故に便通のことをフカ、ビィリィといふ。ほか、ゐり(外居)の義である。ゐり(居)は坐ることで、動詞のゐる(居。坐)から出來た名詞、立居(たちゐ)振舞(ふるまひ)、長居(ながゐ)の

「居(ゐ)」と同じである。「蹲踞する」のをタチィ・ビィリィといふ。「立居(たちゐ)り」で、半ば立ち、半ば坐るの狀態であるから、かういふのである。動詞にすればビィルン即ち「居(ゐ)る」である。水甕を「ビシャーミ」といふが、これはビシ・カミ(居(ゐ)せ甕(かめ))の義である。

我が國の古代にも「ゆひ」といふことがあつたと見える。「ことばの泉」には「雇人」と解し、「言海」には「結の義、相連るる意かと云、互に人を傭ひて「早苗を植うることと云。よひ。殘る田は十代に過じ明日はたゞゆひも傭はで早苗取りてむ」とある。これは夫木の歌から解釋したのであらう。實際上の「ゆひ」を琉球で見ると、主に農繁時に近所の者同士が別に賃銀などを出して人夫を雇入れるのではなく、互に交替して出て助け合ふことである。家造り、墓普請にも勿論行はれるそして其の出て働く人を特にユイ・ピィトゥ(ゆひ

人）といふのである。

貴人の逝去するのをマーラシィンといふが、まからす（罷爲）の義であらう。喪家をピイトゥ・マーラシィ・ヤー即ち「人罷爲屋」と言ふ。

（四）

太陽をティダと言ふが、ティラ（照）の轉化したものであらう。又月をチィキィ或はツク・ヌ・ユーといふ。「言海」には「月夜、つきよの古言。時鳥此從鳴き渡れ燈火を都久欲に擬へ其影も見む」とあり。而して「月夜、月の光明ある夜。（闇夜に對す）」といふことから見ると都久欲を文字通り月夜即ち月の輝ける夜と解釋してあるのである。これでは「時鳥」の歌は解し難い。これは單に「月」の古語でなからうか。「東から上りおはす大ツクヌユー」といふ歌もある。星はプシィといひ、流星をユーバイ・プシィ即ちよばひぼし（婚星）といふ。又「明の明星」をアカ・プシィといひ、「宵の明星」をユー・ダチィといふ。古語の「あかぼし」、「ゆふづつ」に同じである。尚ほ日月を尊敬してティダ・ン・ガナシィ、チィキィ・ン・ガナシィといふが、カナシィ（加那志）は接尾最上敬稱語である。國王をウシュ・ン・ガナシィ（御主加那志）といつてゐる。思ふに、この加那志は古語「いとほし」、「いとし」の義の「かなし」の意味が轉じたのでなからうか。本來の可憐の意味では人名にも「カナシ」を附け、名詞としてカナサ、感嘆詞としてカナサー（かなさはの義）、形容詞としてカナサーン（かなさある の義）、動詞としてカナサ・シィン（愛す）、熟語としてカナサ・マリ（愛嬌のあること。かなさ生れ）カナサ・ナー（可憐名）などがある。「獨子にさへありければ最かなしうし給ひけり」、「浦漕ぐ舟の綱手かなしも」、「我がかなしと思ふ娘を」の「かなし」と同義に用ひられてゐる。

序に形容詞系の語を二三例擧げて見よう。「アタラサ」は「惜み愛すること」、古語「可惜（あたらさ）」と全然同じである。斯る名詞の語尾を長音にする時には感嘆詞となり、長音にして撥音（ン）を添ふる時には形容詞となる。前者は詠歎の情を表はす「は」に相當する「ヤ」を添へたもので、後者は現存を意味する「ある」に相當する「アン」を添へたものである。即ち「アタラサー」といへば「アタラサ・ヤ」（あたらさは）の義で感嘆詞となり、「アタラサーン」といへば「アタラサ・アン」（あたらさある）の義で形容詞となるのである。又動詞に用ひる場合には其の名詞形の語に働きの意味を表はす「爲（す）」に相當する「シィン」を添へるのである。即ち「アタラサ・シィン」といへば「惜愛する」ことである。

「あやし」といふ形容詞は「アヤッサーン」といはれるが、「あやしさある」の義である。神怪不思議なることや疑はしきこと、險呑なることなどに用ひられてゐる。感嘆詞としてアヤッサー（あやしさは）、名詞としてアヤッサ（あやしさ）である。珍奇の意に用ひられるミジィラサ（めづらさ）に於ても、これと全く同樣のことがいへる。

八重山語にて重き意を表はす形容詞に二通りの言ひ方がある。一は「ンブサーン」で、他は「イッサーン」である。前者はおもさある（重有）の轉化したものであるが、後者はいかしさある（嚴有、重有）の變化したものかと思はれる。いか（嚴、重）は「いかし」、「いかいかし」、「いかつし」、「いからし」などと活用してゐる。いかづち（雷）の「いか」、いかる（怒）の「いか」もこの義であらう。又「いか」は「みか」に轉じてゐる。甕速（ミカハヤ）日神（ヒノカミ）、武甕槌神（タケミカヅチノカミ）などの「ミカ」もこれに關係があらう。この語の變化狀態は前記の諸語と全く同じである。

意表に出づる異常なる出來事に恐れを感ずる場合に「ウスサーン」又は「ウスマサーン」といふ形容詞を用ひる。前者は「ウスサ・アン」、後者は「ウスマサ・アン」で、「アン」は存在を意味する「ある」の義で、形容詞を作る語尾である。「ウスサ」は古語「おずし」、「おぞし」から出來た名詞で、「おずさ」、「おぞさ」、「おずしさ」、「おぞしさ」の義「ウスマサ」は同じく古語「おずまし」、「おぞまし」から出來た名詞で、「おずまさ」、「おぞまさ」、「おずましさ」、「おぞましさ」の義である。古い例を見るに「強女謂之於須志（オズキニ）因太后之強（オズキニ）」、「最（イト）おぞく心かしこくおはし給ふ」、「守護といふものへ目代よりは、おぞましきをするたれば」、「かく、おぞましくは、いみじき契深くとも（源氏物語帚木）」など枚擧に遑がない。天宇受賣命（アメノウズメノミコト）の宇受賣（ウズメ）は於須女で、矢張り恐るべき強い女といふ意味である。「恐しく思ふ」を「おぞむべくある」といひ、「子供の有智」を「おぞい」、「自分の損にならぬやうな事をする者」を「おぞい奴」、「暗愚なる者」を「おぞ馬鹿」などといふのも皆これで、八重山で食ふに堪へないやうなまづき汁を「ウス・ズル」といふが、この「ウス」もこの意義である。

琉球に傳はる創世神話は伊波氏の「古琉球」、佐喜眞氏の「南島說話」等に紹介せられてゐるから參照せられたい。八重山では『太初下界は滌邈たる青海原であつたが、海の沙が相寄つて白洲となり、そこに「アーマンツァー」即ち宿借蟹（寄居蟲）が生じ、これより白洲も段々成長して島となり、草木、禽獸、人類も發生した』といつてゐる。思ふにこれは海人（アマ）族の一派がこの島を發見して定住したことを語るのであらう。太古のことを「アーマ・ン・ユー」即ちあまんよ（海人世）といつてゐるのでも凡そ察知することが出來る。

日本書紀の八州起源の章、第五の一書中に遂將（ツヰニミトノ

合交、而不知其術、時有鶺鴒飛來、搖其首尾二神見、而學之、即得交道」とあるが。八重山語で、鶺鴒をズー・フナヤーといふ。「ズー」はを（尾）で、「フナヤー」は「フナイする者」、即ち「フナイ鳥」である。偖てこの「フナイ」は何であるかといふに、動詞のくなぐ（交合）から出た名詞の「くなぎ」の轉化したものである。「くなぎ」から「フナイ」が出たといふ旁證として他の例を引いて見よう。國語の八重山語に轉化する法則の一として、く（ku）音がフ（fu）音になる場合が甚だ多い。例へば

く　し（櫛）――フシィ
く　せ（癖）――フシ
く　ち（口）――フチィ
く　ふ（食）――フォーン
く　む（汲）――フムン
くらし（暗）――ファサーン
くろし（黑）――ファサーン
く　さ（草）――フサ
く（灰汁）――アフ
ぬくむ（温）――ヌフムン

の如きで、これはkuといつたものがk音の脱落に依つてfuとなつたのである。又「ぎ」が「イ」に變化するのは音便に依つて子韻gが脱落したのである。この例を一二擧げて見る。

か　げ（蔭）――カギ――カイ
あげる（上）――アギルン――アイルン
さげる（下）――サギルン――サイルン
こぎつく（漕着）――クギ・ツクン――クイ・ツクン
とぎこ（研來）――トゥギ・クー――トゥイ・クー

これ等に依つて「くなぎ」と「フナイ」との關係が明かになつたと思ふ。動詞としてはフナイン、フナイルンの二語があるが、前者は「くなぐ」で

後者は其の口語に相當する「くなげる」といふ意味である。「搖蕩する」、若くは「納入する」の意義がある。これから交合の意味にも轉化したのであらう。更に哺乳動物の場合にはカナイ（名詞）、カナイン（動詞の文語形）、カナイルン（動詞の口詞形）、若くはチィガイ（番）、チィガイン（番ふ）、チィガイルン（番へる）などがあり、昆蟲類の場合にはズッカーリィ（つがり。連）、ズッカールン（つがる。連）などの語があつて、つるむ（遊牝）、交尾などの意味を表はしてゐる。

「サールン」といふ語はさはる（觸。障）といふ意味と「連る」「娶る」といふ意味とを含んでゐる。トゥジィ・サールンといへば「刀自娶る」の義で、妻帶することをいふのである。

國語のうまれ（生）は沖繩語でウマリ、八重山語でマリである。これには「出產」といふ外に、性質、天資、うまれつき（生付）などの意味があり、性質の善良なる者をイー・マリといひ、不良なる者をヤナ・マリといふ。「イー」は「善い」で、「ヤナ」は古事記にも見える「厭魅（イナシコメシコメ）き國」といふ「イナ」の轉化したものでなからうか。そしてこれには憎惡の意味と凶殃の意味とがある。例へば

ヤナ・ンザ——惡い奴。憎い奴。

ヤナ　ー——惡い。憎い。

ヤナ・ムス——惡者。魔物。化物。

ヤナ・クトゥ——惡事。凶事。災禍。

の如きで、形容詞としてはヤニッシャーンとなつて、穢し、忌はし、惡しなどの意味になり、動詞に轉じてヤブン（誘惑す）、ヤビン（惡くなる）、ヤビルン（ヤビンの口語に相當するもの）などになつてゐる。「マリ」は熟語に用ひられて

マリ・ジィマ（生れ島）——鄕里。生地。

マリ・ピィン（生れ日）——誕生日。

などになり、自動詞としてマリン（生る）、マリル

ン（生れる）、他動詞としてマラ・シィン（生らす。產む。仕上ぐ）となつてゐる。

木の實をキー・ヌ・ナリィといふが、きのなり（木生）の義である。動詞としてはナルン（生る）、ナラ・シィン（生らす）といつてゐる。又、「ナシィン」も「生す」から產む意味に用ひられてゐる。更に卵生の場合にはシィデンといひ（巢出の義であらう）、轉化してもぬく（蛻）變形するなどの意味に用ひられてゐる。熟語としてシィディ・カイ（水になつた粥）、シィディ・ッ・クリィ（拔殼、蛻）などがある。

むし（蟲）の觀念は今日よりも古は餘程範圍が廣かつたやうである。言海の蟲の條を見ると「產の義、化生の意と云。人類、禽獸、魚介の外の動物の稱、羽あるに蝶、蜂、螽斯、蚊等あり、足あるに蛙、蜥蜴、守宮等あり、多足なるに蜈蚣、蚰蜒、蠶、衣魚等あり、鱗あるに蛇あり、裸にして足もなきに蚯蚓、水蛭あり、殼あるに蝸牛等あり、皆大抵卵生なり」とあるが、古くは人類禽獸にまで蟲といつてゐたのである。八重山でも禽獸をトゥリィ・イィキィ・ムシィ（鳥生蟲）といひ、家畜をチィカナイ・ムシィ（養ひ蟲）といひ、惡人をヤナ・イィキィ・ムシィ（惡生蟲）といつてゐる。支那古代に於ても鳥を羽蟲、雉を華蟲、虎を大蟲麒麟を毛蟲、人間を裸蟲といつてゐた。孔子解語に鳳凰を羽蟲の王、人間を裸蟲の王と稱してゐるのでも分る。動物全體が天地の創成期に於て所謂「葦牙の萌え出づるが如く產成りて」種々の狀貌に配せられたといふ考を汲み取ることが出來る。

今日の野は萬葉以前には皆「ぬ」といつてゐる。琉球語では「ヌー」である。「ぬ」といふ短音を「ヌー」と長音に發するのは音韻の問題で、發音し易いからであらう。め（目）をミー、や（屋）をヤー、き（木）をキー、て（手）をティーといふ如

きは皆さうである。古事記に「生野神名鹿屋野比賣神、亦名謂野椎神。」とある。野は未開墾の草の自然に生え茂つた人里を離れた土地である。即ち「赤駒を野山に放し」の野山は野と山とを併稱したのではなくて、未だ鋤鍬を入れない山といふことである。野に手を入れて開いた所が即ちはたけ（畠、畑）で、墾處の義であらう。畠毛の義とするのはどうかと思ふ。琉球には毎年春秋二回農作の成績を評定する行事がある。之を「ハル・シューブ」といふが、墾勝負の義である。墾は荒地（アラシィ）を開發することで、古語にも例が頗る多い。墾田、治田神社（延喜式）新墾地、「住吉の岸を田に墾り蒔きし稲の」、「小墾田之、坂田乃橋之、壞者、從桁將去、莫戀吾妹。」（萬葉十一）、「新治の今作る路」などがある。土をンタ（ニタ）といふ。「丸邇坂の土を初土は膚赤らけみ、下土は土黑き故（古事記應神天皇御歌）」の「ニ」、埴の「ニ」などと關係があると思はれる。

高臺に對して低い所を「トー」といふ撓の義であらう。古事記の大戸惑子神を山のたわご（凹所）を守護する神と解する説や古事記傳の「山のとかげ」は「山のたうかげ」即ち「たわかげ」で、低い所であるといふ説から見ても「トー」が「たわ」の音便であることが察しられる。「自山多和引越御船逃上行也」ともあり、中國西國でも今尚ほいふさうだから一層注意に値する語である。

村中の廣場とか、山中の廣場などを「メー」といふが、薩南奄美大島では「ミヤ」といつてゐる。八重山語で「ミヤ」は「メー」になることを知らば同一語であることがうなづかれる。即ちミヤラ（宮良）が「メーラ」になり、ミヤク（宮古）が「メーク」になり、ミヤラビ（女童）が「メーラビ」になつてゐる。

沖繩本島では城を「グシク」といつてゐるが、

八重山では石垣を「グスク」といつてゐる。但し人名又は地名などでは城の字を矢張り「グスク」といふのである。人名では山城（ヤマグスク）、花城（ハラグスク）、新城（アラグスク）、城田（グスクダ）、金城（カナグスク）などがある。沖縄本島では大城（オーグシク）、中城（ナカグシク）、玉城（タマグシク）、城間（グシクマ）などがある。「グスク」の「グ」は敬語であるから、スク、シクが語根である。今之を地名に求めて見るならば、石城丘（イシスクムリイ）、登野城（トウヌスク）、地城（ギシユク）などがあり、總て石壘を設けた所にいふのである。吾が古語にもそこ（塞）、しき（磯城）などといつて居り日本といふ代りに敷島といふのも、この意味であるといふ。島尻郡に佐敷（サシキ）、佐舗（サシキ）、識名（シキナ）、肥後にも佐敷（サシキ）、佐職（サシキ）、色見（シキミ）、豐前に敷田、大隅に敷根、肥前に志久（シク）、その他阿波、三河、備後、美濃、大和等にも、これと近緣の地名がある。金澤博士は朝鮮では「スキ」といつてゐるといはれた。石垣島の富崎に「ミナスク・ムリィ」（或はミーヌスクムリィ）といふ小丘がある。俗に「貝底岡」と記してゐるが、これは蜷城丘（ミナスクムリイ）であると思ふ。蜷は「ンナ」といひ、田螺を「ター・ンナ」といつてゐる。國語の「にな」、「みな」を「ンナ」といふのである。又野底村の西南方に突出する岬を米底崎（ユニスク）といふが、これも洲城（ユニスク）岬であるべきである。

桃里に空岳（カラダキ）といふ山がある。樹木のないために附した名である。古事記に「青山を枯山（カラヤマナ）如す泣枯し」とあるに對して古事紀傳では「枯山（カラヤマ）は岾の字の意にて木草のなき山を云なるべし凡て物のなくて空しきを迦良（カラ）と云」と解いてゐる。

琉球では北を「ニシ」といつてゐる。金澤博士はイニシ（過去）の義として球琉人が北から南へ向つて進んで行つたといはれてゐる。これと同じく朝鮮人も北から南進し、日本人及びアイヌ人は西より東へ進んだと說かれてゐる。

九州以北の地方をヤマトゥ（倭）といひ、本州を特にウー・ヤマトゥ（大倭（オホヤマト））といつてゐる。蜻蜓

を沖縄で「アーケーズ」といひ、八重山で「カケージィ」といふが、古事記、日本書紀、和名抄、萬葉集等に見ゆる阿伎豆、秋津、阿氣豆、加牙呂布、加藝呂肥などと關係の深い語である。支那を「トー」といふが、唐代になつて支那を知つたためであらう。尤も沖縄本島では唐手（カラテ）、唐芋（カラウム）などといふこともあるが、八重山では唐手（トゥティー）、唐桃（トームン）などといつてゐる。何れにしても支那を知り初めた時代の前後を言ひ表はすものと思はれる。

（五）

わが國神代に於ける神樣の御名には男女兩性の區別を立てゝあることが多い。例へばヲ（男）、メ（女）。ヒコ（毘古、比古、日子）、ヒメ（毘賣、比賣、日女）。ギ（岐、藝）、ミ（美）。ジ（土）、ビ（日）。ヂ（地）、ベ（辨）等がある。更に琉球語との比較研究の結果、別（ワキ）も男性を表はしてゐることが分つた（國學院雜誌二九ノ七、參照）。

夫婦をミュートゥ（めをと、めうと）といはないこともないが、一般にはトゥジィ・ブドゥ即ち刀自（トジ）夫（ヲト）といはれてゐる。この語は男女がミードゥン・ビギドゥン（女共男共（メドモヲドモ））といはれ、晝夜がユーリィ・ピィーリィ（よるひる）、右左がピィダリィ・ネーラ（ひだりみぎ）といはれ、東西がイーリィ・アーリィ（西東）といはれるのと同じ言ひ方である。古事記にも、「小碓命は東西（ニシヒムガシ）の荒ぶる神、不伏人等（マツロハヌヒトドモ）を平（コトム）けたまひき。」とか、「僕（アー）は今より以後（ユクサキ）、汝（ナー）が命（ミコト）の晝夜（ヨル）の守護人と爲りてぞ仕へ奉らむ」などと書いてある。後妻はウワナリ（うはなり）といはれる。

父を「シュー」といふ場合には father の意味であり、「アッチャ」といふ場合には papa の意味となる。而してこの語は役人、主上にも用ゐられてゐる。又母をアッパ（平民語アブ）といふ場合には阿母（アモ）の義で mather の意に用ゐられ、「ジッチ」

といふ場合には「乳（チチ）」の義で御袋、mama の意に用ひられる。

年長者はシジャ（兄）で、年少者はウトゥドゥ、而して吾兄（アセ）はアジャである。長兄をフッチャといふが、フーアジャ——ウフアジャ——オホアジャ（大吾兄（オホアセ））から出たのである。仲兄をガッチャといふのもナカッチャ——ナカアジャ（仲吾兄（ナカアセ））の變化である。又長姉を「ホンマ」といふのはフーアンマ——ウフアンマ——オホアンマ（大姉）である。仲姉はガンマ——ナカンマ——ナカアンマ。嫂（あによめ）はヤンマで、家姉（ヤアシマ）の義である。

「をぢ」をブジャ、「をば」をブバといふが、これは叔父、季父、叔母、季母、即ち父の弟夫婦の謂である。父の兄夫婦即ち伯父、伯母に對してはフーシュー、ホッパといふ。フーシューはウフシュー即ち大父（オホ）で、ホッパはフーアッパ——ウフアッパ即ち大阿母（おほあも）の義である。

友はドゥシィといひ、同士（ドシ）の義である。

（六）

頭をツブリィといふが、つぶり、つむりの轉化したもので、矢張り圓形（ツブラ）の氣持でいつてゐる。それ故瓠（ひさご、ゆふがほ、ふくべ）にもいひ、三味線の胴にもいひ、更に又機（ハタ）の經糸を卷き付ける平きH形の具にもいつてゐるのである。

耳の中が腐つて膿汁の滴り出る病をミン・ダリィといふが、みみだり、みみだれ（耳聹、耳漏）と兄弟語である。和名抄に「病源論云聹耳（上音亭和名凡美々太利）熱耳生膿汁也」とある。

腹をバダといふ。わた（腸）の義である。「わ」が「バ」になるのは轉化法則の一で、例へばわる（割）をバルンといひ、わたる（渡）をバダルンといふなどの例がある。「た」が「ダ」に變じたのは上音の濁音「バ」に assimilate したのである。「バ

ダ」は總て中に籠つたものをいふので、例へばわた（綿、絮）をも「バダ」といひ、從つて蒲團の綿（バダ）とか綿入（バダイリ）などの語がある。又石垣を築く際に中部に入れる小石をも「バダ石（イシ）」といつてゐるのである。して見ると八重山語の「バダ」は矢張り腸（ワタ）の義であることが分る。然らば腹を「ハラ」といつたことはないかといふにある。馬の腹を括る帶（勒肚巾）をバラビィ若くはパルビィといふが、これ等はバラ・ウビィ及びパルウビィの縮約した語であるから、腹を或る時代には矢張りハラ、ハルといつてゐたのである。語感からいふと、「ハラ」は表面の廣平なるを示し、「ワタ」は內部の幡曲せるを示すやうである。

臍を「プス」といふ。和名抄「保曾（ホソ）俗云倍曾（ヘソ）」。角帶をプス・ウビィといふのは臍近く上部に締めるからで、その上に重ねて締める帶を大帶（ウフウビイ）といふのである。この語は更に凧の裏面から竹骨を隱すために糊張りする紙にまで轉用されてゐる。

きも（肝）をキィムといふが、その第二義に至つてキィム・マイシャ、キィム・グマサといへば大膽、小膽の意味に用ひられる。尙ほ第三義として心、情意などの意味に用ひられてゐる。即ちキィム・ヌ・ファー（肝の子）といへば寵愛兒となり、キィム・グクル（肝心）といへば人情、心意の意味になり、キィム・イタサ（肝痛さ）は氣の毒、キィム・ヤンサ（肝病さ）は愍然、キィム・グリシャ（肝苦さ）は慘憺、キィム・ヤニッシャ（肝汚さ）は意地惡の意味として用ひられてゐるのである。

足を「パン」といふが「ハギ（脛）」の轉化したものである。又爪先を「ペー」といふのは沖繩本島語ヒサ、ヒシャ（足）の轉じたものであると思はれる。尤も跣足をカラ・ピシャ（空足）とはいふが。「ペー」は又「ウシィ・ヌ・ペー」、「ンマ・ヌ・ペー」といふ時には「牛の足跡」、「馬の足跡」となる。

併し「ペー・ラ・ツクムン」といへば足の痺れるのをいふのであるから、足の意味に用ひたことは確かである。「爪立てる（擧踵する）」ことを「ペン・タディルン」といひ、「跪坐する」ことを「ペン・チィキィ・ビィリィ（爪先付居り）」といふのなどは爪先の意味に取つたのである。

膝を沖縄本島語では「チンシ」といひ、八重山語では「ツブシィ」といふが、日本書記に「流血汲（イルツブラキヲ）踝」とあり。又和名抄に豆布志（ツブラフシ）とあるのから觀ると同感の語であるらしい。即ち「圓節」の約であると思はれる。踵（くびす、きびす）を「アドゥ」といひ、「あくと」の轉であらう。

尻を「チビ」といふ。現今種子ケ島や伊豫などでも「ツペ」といふさうである。和名抄には玉門（女陰）なりと說いてある。これは海螺（つび）から出た語だといふ。子安貝をシィビィといつてゐるが、これと關係があるかどうか。肛門をチビ・ヌ・ミー（尻の目）といひ、眦をミー・ヌ・チビ（目の尻）といつて居り、又手綱の口綱に繫ぐ後綱をチビ・ジィナ（尻綱）といひ、襁褓をチビ・ジィケー（尻敷物）といひ、注連繩をチビ・ナー・ジィナ（尻長綱（シリナガヅナ））といつてゐる。これは藁を七本、五本、三本といふ順序に取つてその端を五寸位宛長く垂して作るからいふのである。尙ほ殿（シンガリ）をチビ・フショー（尻糞）といひ、尻とも口とも判斷のつき兼ねるものをチビ・フチィ・バッパー（尻口同貌）といふ。又尻端折（シリハショ）ることをチビ・カライ（尻絮げ）といひ、倒懸することをチベー・ウイ・ナシィン（尻を上になす）といひ、自ら伏すことをチベー・ウイ・ナルン（尻が上になる）といふのである。

男根を「タニ」といふ。植物の結實（なり）にして種子に供する物、若くは核をも「タニ」といふのである。ムヌ・ダニ（物種子）、ピィトゥ・ダニ（人種子、人胤、血統）、タニ・トゥリィ（種子取、若くは男根

取、去勢、睾丸切）、タニ・ドゥリィ（種子取祭）、タニ・ン・ガーリィ（胤變）、タニ・ヌ・ソー（男根の竿＝陰莖）、タニ・ヌ・パンキャー（男根のむくれもの＝紅茸）などの語がある。古事記傳に「物實は毛能邪泥と訓べし、書紀には根とあり佐泥と多泥とは其物も名も通へり後の世にも人の母を云ふには某の腹、父を云ふには其の種と云木草の種子も同し」、といつてある。麻羅は多く下卑て云ふ。アカ・マラー・ウシィ（赤麻羅牛＝黄牛、飴牛）、マラ・タラー（麻羅垂れ者＝褌を締めざる者）などの賤稱語があるが、直接男根の意味に用ひることは滅多にない。

陰嚢を「フリィ」といふ。「ふぐり」の轉化したものである。ふくろ（袋、嚢）と同じく、ふくれ（脹）の義でなからうか。この語は又その形狀からして秤に用ひる錘にもいひ、睾丸の片方の大なるものをカタ・フリィ（片ふぐり）、脹れて大なるものをウフ・フリィ（大ふぐり）といふ。尙ほ貝の肝臟を「ンゴーリィ」といふが、これはにが・ふぐり（苦陰嚢）の意味である。

陰部若くは腋窩に生ずる毛を他の所の毛と區別して「フイ」といふ。これは黑毛の義である。即ちクロ・ケ——クル・キ——クーギ——フイと變化したのである。現に沖繩本島では「クーギ」と發音してゐる。

（七）

「クサ」は本來おこり（瘧）の意味であるが、轉じて病氣の意味にもなつてゐる。萬葉集卷六、石上乙麻呂卿配二土左國一之時歌に、「磯乃埼前、荒浪、風爾不令遇、草管見、身疾、不肖、」とあるが、萬葉集辭典には、「くさつゝみ、枕、やまひ、くさつゝみは草を席として臥すといふ意味で、上代の旅寢の有樣である。かく草を褥として臥る時は、毒蟲の爲

に害せられる事が多いといふ考へからやまひの枕詞としたのであらう」と說かれてゐる。マラリヤの猖獗する八重山では瘧に罹つてふるふ者が多いからこの語をよく味ふことが出來る。

疥癬を「コーシィ」といふ。類聚名義抄にこせ（脊瘡）とあり。又倭訓栞には「こせがさは風癬也一云古癬、或は小狹」と。今日名古屋地方ではこせといつてゐる。この病に煩はされることをコーシィ・カクン（こせ・かく）といひ、その者をコーシャー（こせになれる者）といふ。更に又全身に亘つて灰白色の細き皮癬を煩へる者を「シャミ・コーシャー」といふ。「シャミ」は「サミ」の轉にして米の碎けて未だ粉といふに至らざるものをいふ。

疣（イボ）を「フチィベー」といふ。「言海」には、ふすべ、贅、瘤（コブ）の古名、和名抄「贅、布須倍、縣疣、佐賀利布須倍」とあり、天平勝寶二年九月五日大宅朝臣賀是萬呂奴婢見來帳には、「婢眞枝足女　年廿八右眉後上布須閉」と書いてある。これ等に依つても「フチィベー」が疣の古語であることが充分明かである。

跛を「ナイグ」といふ。古語なへぐ（蹇）の義である。或は賤稱してナイガー（蹇者）とも、パン・ブラー（足折者）ともいふ。「パン」ははぎ（脛）の轉化したもので、足の意味に用ひてゐる。源氏物語に、「天の下に目つぶれ足折れ給へりとも」とあるのから見ると、矢張り蹇の意味に用ひた古語である。

手足が筋肉が痙攣を起して引きつることを「ガラシィ・マーリィ」といふが、古語にも「からすなめり（轉筋）」といふのがある。今日の腓返（コムラガヘリ）である。

疫痢を「シィブリィ・バナ」といふ。「シィブリ・バナシィキィ」の略で、腹を搾るが如く下すはやりやまひといふ意味である。古語の「尻から口からこくやまひ」即ち「まりはきやみ」に比べて見る

と同じ感じで出來たやうに思はれる。

（八）

蔀（シトミ）の語源とする苫（トマ）を矢張りトゥマといつてゐる。「苫を荒み」の古歌に徵しても古くからある語である。苫を被ひとせる庵をトゥマ・ヤー（苫屋）といつてゐる。

家を作る時に、椿（タルキ）の上に薄（ススキ）又は細竹を以て編み簾の如くして被ふものがある。これをユッチィリィといつてゐる。室壽詞に、「取置蘆藿（エツリ）者、此家長御心之平也」といつてあるが、こゝの蘆藿は即ちこれである。言海には、「えつりは枝釣（エツリ）の義か」といひ、東雅には、「エツリとは、エは上也、ツリは釣（ツル）也、上に釣る所の者なるをいふなり」と說いてゐる。又辭海には蘆藿（えつり）と書いてある。

かべ（壁）を「クビ」といふのは、古語のくべ（墻）が轉化したものであらう。

薄（ススキ）や竹などで作つた粗目（あらめ）の垣をマーギィといつてゐる。まがき（籬）の轉化した語である。和名抄に、「籬、末加岐、一云、末世」といつてある。その語源に一、目垣（マガキ）で、隙間のある垣といひ、二、馬垣（マガキ）で、馬防ぎであるといふ。萬葉集に、「馬柵（ウマセ）」といひ、新撰字鏡に、「楯、馬夫世支」といつてある。言海の引例に、「色カヘヌまがきノ竹ノませノ内ニ」、「山賤ノ、垣ホニ圍フ、ませ垣ノ」、「御捧物ハ、白金ノ御蓋ノ上ニ、ませ結ヒテ」、「柜楮（マセ）越シニ、麥食ム駒ノ」（字ハ巨木若木ノ合字）などを擧げてある。せ（塞、柵、楯）は八重山語では「シー」となつてゐる。即ち猪に芋畑を荒された彼等は山を圍んで東北は平久保（ヒラクボ）崎から西南は富崎（フサキ）に至る、延長約十里の間に高さ五尺の石墻を築き、山に向つた側に深さ六尺ばかりの溝を掘り、石垣の上には矢來を設け、そして山へ行く所には門（山の門（ヤマヌゾー）といつた）を開き、木戸を立てたのであ

る。これが即ち所謂八重山の萬里の長城で、俗に「シ！・ヌ・グスク（塞の御城）」と稱するものである。古事記の豐玉毘賣命の條に、「其方に御子產みたまふを竊伺みたまへば……其の伺見たまひし事を知して」とあるが、こゝの「カキマミ」は垣間見で「鵜の羽を葺草に爲て」造られた產殿の垣の隙間から竊かにのぞき見られたのである。枕草紙にも、「ある人の局に行きて垣間見して、又若し見えやすると來りつるなり」とあり。八重山語ではこれと全く同じ意味で、「マーシ・ミール ン」といふ語がある。これが即ちませみる（籬見）である。和名抄の、「籬、末加岐、一云、末世」といふのから觀ても毫も疑ふ餘地を見出すことが出來ない。

屋根を葺くには、竹の先端を削り、鋭くして、孔を穿ち、これに繩を通して、屋根裏から差込みて屋上の者に結かしめるのである。この竹槍が即ちプク（ほこ、矛）である。茅を抑へる先を尖した小木をキ！・ブグ（木矛）といひ、古名「イヌマン」であるといふ。石打を「イシ・ブグ」といひ、釣竿を「ツ・ブグ」といふのも矛に緣があらうと思ふ。

藁を「バラフタ」といふが、古語わらふだ（圓薦）の意味でなからうか。和名抄に「和良布太、圓草褥也」とあり。枕草紙には、「圓坐の程なん侍る」、又端近う同じ心なる人、二三人ばかり、火桶中に据ゑて……圓座さし出たれど」などと見えてゐる。これに對して八重山では「イン・チャ」といひ、ゐんざ（圓座）の義である。圓座即ち和良布太は藁を捩ぢて圓く渦形に組みたるもので、木竹、板などにて作れる床の上に坐する時に敷き用ひる物である。藁をバラフタ（和良布太）と言ひ誤つたのは、恐らく藁を以て專ら圓褥を作つた爲めであらうと思はれる。わらしべ（稭）即ちみご（稈心）をバラフタ・ヌ・ジィー（わらふたの髓）とい

ひ藁にて綯へる繩を棕櫚繩、フガラ綱、アザナシィ綱等に對してバラフタ・ジィナ（わらふた綱）といふのである。

（九）

飯を沖繩語は「ウバン」、「ンーバン」といひ、八重山では一般に「ンボン」といふが、これは「ごはん（御飯）」の義である。稀に眞榮里などでイー（飯）といつてゐる。尙ほ供膳の食物を「キ」といつてゐる。即ち古語け（饌、食）の轉化したものである。ピィトゥ・キ（一饌）、フタ・キ（二饌）アサ・キ（朝饌）などの語がある。又、貴人の食物をオイシィ・ムヌと云ふ。袁志物即ち食物である。古事記景行天皇の條に、「是に、新室樂爲ばと言動みて、食物を設備へたりき」と書いてある。又貴人の食物を召されるのをオイシィンといふ。食すの義である。萬葉集卷一に、「空蟬之、命乎惜美、浪爾所濕、伊良虞能之、玉藻苅食」とある。

甘藷を東京ではお薩若くは薩摩芋といひ、薩摩では琉球芋といひ、琉球本島ではンム（ウム）若くは唐芋（カラ・ウム）といつてゐる。これで我が國に於ける甘藷の分布地帶及び其の由來の順序が凡そ知ることが出來ると思ふ。就て八重山ではこれを「アッコン」といつてゐる。この語は一寸聞いただけでは國語と無緣の蕃語のやうであるが、深く調べて見ると矢張り國語と同形の語であることが分る即ちアッコンはアカ・ウン——アカ・ウム——アカ・イモと變化したもので、赤芋の義である。これは、その初め臺灣から傳來した番薯の色が赤かつたからであるといふ。八重山の最南端なる波照間島ではアガンといひ、最西端の與那國島ではウン・ティーといつてゐる。アッコンが赤芋であるといふ旁證に、甘藷から取つた澱粉をウム・クジィ（芋葛）といひ、又その殘滓を握り固め

て乾した物をウム・カシィ（芋滓）といふのなどを擧げることが出來る。尙ほ芋をウン（ウムの積りで）と發音してゐる證據は、八頭を單に「ウン」といひ、零餘子（むかご、ぬかご）をウン・ナー（小さき芋）といひ、自然生をボー・ウン（棒芋）玉の如き實の澤山に生る薯をナリ・ウン（生芋）といつてゐるのでも明かである。

肉をシィシィといふ。古語「しし」の義である。斷をパサシィといふのはパ・シィシィ（齒肉）の轉化したものである。廣音に變ずる例は澤山擧げることが出來る。併しこの語は多く獸類の肉に用ひ魚（古語いを、沖繩語イユ）の肉にはミィーといふ。身の義である。「いを」が「イズ」になるのは、を（尾）が「ズー」と發音されるのと同じである序でに、鱗をイラギィといふが、甍の語源とする鱗の間に置いて考へると一層明瞭になると思ふ。即ち、うろこ――いろこ――いらき――いらか。積卷雲をイラギィ・フム（鱗雲）といふ。

鹽をマースといふのも、眞潮の義である。酢漿草をマース・フサ（鹽草の義）といひ、鹽辛蜻蛉をマース・ファイ・ヤー（鹽食ふもの）といふ。

芭蕉の葉を「バソー・ヌ・パー」、月桃の葉をサミン・ヌ・パー」、木綿花樹の葉を「ユーナ・ヌ・パー」、蕃瓜樹の葉を「マンジュマイ・ヌ・パー」といふのであるが、これ等の植物の葉を以て食物を蔽ひ、或は敷き、或は握るに用ゐる場合には、特に「カサ・ヌ・パー」といふのである。「炊の葉」の義で、その用途に從つて同一物を異つた名稱を以て呼び、或は又多種の物を同一名稱を以て呼んでゐるのである。國語でも柏を「かしは」と呼ぶのは古代に於てこれと同じ風習が存したからであらう。古事記に膳夫と見えてゐる。

芋飯などを練るに用ひる櫂形の杓子を「イビラ」といふ。これはいひべら（飯篦）の義で、へら（篦）

即ちピラは竹木を細長く平に削つて先を尖らしたもので、金屬製のへら（鏟）の出來る前に農耕に用ひられたものである。斗科形の杓子は重に飯を裝ふのに用ひられるからサンシン・ピラ（再饌飯篦）といつてゐる。又汁を裝ふ杓子を「アッカイ」といふが、これはあくかひ（汁匙）の義で、あくは總て液汁、かひは匙で、今日の如く木製又は金屬製の汁杓子の出來なかつた時代には、竹の一端を割いて貝殼を挾んで作つたのである。さじ（匙）をアッカイ・ナー（小さき杓子）といつてゐる。又汁杓子をスル・ガイ（汁匙）といふに對して飯杓子をミシイ・ガイ（飯匙）といふこともある。飯茶碗はマカリィといふ。これなどもわが古語の麻賀利から出たもので、矢張り曲り成りの貝殼を利用してゐたものと思はれる。

單に「サラ」といふ場合には椀をいふのであるが、小皿（クーザラ）、中皿（チューザラ）などといふ場合には陶器の開きて淺きものをいふのである。稍深きものに對してはスーライといひ、最も小さきものには「カユキィ」「カイキィ」といふ。「スーライ」は胡語鈔羅（サフラ）の轉であらうか。

シャク（爵）は盃の古名として用ひたやうであるが、現今は用ひない。古い民謠などに依つて知ることが出來る。即ち黄金爵（クガニシャク）などの語がある。

（一〇）

着物をキィンといふ。きぬ（衣）の義である。その破れて廢物となれる物、即ち襤褸を「カコー」といふが、古語かかは、かかふの轉であらうと思はれる。

布を織るにも今日は倭機物（ヤマトウパトウームヌ）、若くは高機（タカバタ）と稱する稍々精巧なるものを用ひてゐるが、その上（かみ）に於ては島機物（シイマパトームヌ）若くは地機（ジバタ）と稱する極めて原始的なものを使用してゐたのである。古事記の傳ふる、

「天照大御神。坐忌服屋(イミハタヤ)而。令織神御衣之時。穿其服屋之頂(ムネ)逆剝天斑馬剝而。所墮入時。天衣織女見驚而於梭衝陰上而死。訓陰上云富登」の忌服屋で天御衣織女達が用ひた機(ハタ)も恐らくこの地機のやうな不完全な物であつたらう。

機織に用ひる筴(クダ)を作る時、糸車につけて糸を卷くべき管を差し込む太き針狀の鐵線をチィミといふ。古語つみ（紡錘）、今はつむといつてゐる。

琉球の男子は日露戰捷前まで、水仙花頭角柱の簪を頭髮に挿した。即ちかざし（挿頭）である。これは古へ頭髮に草木の花や枝などをさした遺風であると思ふ。枕草紙に、「三月三日(ヤヨイミカ)に、頭辨(トウ)、柳の縵せさせ、桃の挿頭(カザシ)にささせ、櫻腰にささせなどして歩かせ給ひし折、」とあるのもこの風を偲ばしめる。

首には貝殼、木の實、竹を短く切つた管などを絲に貫ねて懸けた。貴人はガーラ・ダマ（珈玻羅玉）即ち瑪瑙質の勾玉を用ひた。これ等は爭鬪の繁しかつた原始時代の人間が敵を威嚇し、或は惡魔を祓除する爲めに爪牙を貫ね、蟲形に象つた殘影であると思はれる。

かんな（鉋）は古くかなといつてゐるが、琉球では今日尙ほ「カナ」といつてゐる。又曲尺を「パンゾー・ン・ガニ」といふが、これも決して異國の言葉ではない。即ち番匠金(ばんしやうがね)である。番匠は大工の古稱で、飛驒、大和等より京都へ勤番に出掛けた木工をいふのである。畿内ではさいづち（槌）を番匠槌(ばんしやうづち)といつてゐる。

甘藷の稍々實(ミ)入りたる頃、その根を穿つて實を取る農具にカノーシィといふものがある。これも古語かなふぐし（鑱）の義である。かなほりくし（鐵掘串）の約轉であらう。

繩を編んで緒を附けたもつこ（畚）を「アウダ」といふ。古語に、あふだ、あをだ、あんだ（篩、

輕籠）などの語がある。又手桶をターングといふが、これはたご（擔桶）の義である。尙ほ擔桶（タゴ）の棒即ち天秤棒を「アイグ」といつてゐるが、これも古語に、あふこ、あふご、あほこ（朸）とある。更に婦人の頭上に物を載せる時に置く釜敷の如き藁にて作りたる物をチィケーといふ、金澤博士の御示敎に依れば、朝鮮にも脊中に物を載する際に置く物を「チケー」といふさうである。

竹の皮を剝いで作つた箕の一種に「ソーギ」といふものがある。形は圓くして淺く廣い。穀類の殼や塵を分け去るに用ひられる。これを九州では「しようげ」といふさうである。その形から肋骨をソーギ・ブニ（箕骨）といつてゐる。

大砲を「ピャー」といひ、砲丸を「ピャー・ヌ・タマ」といひ、爆竹を「ボー・ビャー」といふ。「ピャー」はひや（火箭）で、現今福岡地方でもひやといふさうである。それ故、砲丸は火箭の丸であり爆竹は棒火箭である。尙ほ線香花火（爆聲を發する物）を「ピャー・シンゴー」といふが、これは火箭線香の義である。與那國島にては矢を「ユン・ヌ・ファー」即ち弓の子といつてゐる。

（一一）

夢（ユメ）をイミといふ。古事記傳に「古へは凡て伊米と云て由米とは云はざりき」とある。琉球語では國語の「メ」は多く「ミ」になるのであるから、イミと伊米（イメ）とは同然の語である。くべ（墻）をクビといつたのと變りはない。

黎明、早旦の意味にわが古語では「つとめて」といつてゐるが、琉球ではストゥムディといつてゐる。例へば、ストゥムディ・ン・アーシ（つとめて毎に）、キュー・ストゥムディ（今日つとめて）、ストゥムディパイシャ（つとめて早く）などの語がある。枕草紙を見ると、「雨の降りたるつとめてなごは」

「つとめて日さし出づるまで」、「皆寢てつとめていと疾く局に下りたれば」など澤山出てゐる。その他枚擧に遑がない。

昨年、去年を「クズ」といつてゐる。わが古語こぞの轉化したものである。又昨夜を「ユビ」ともいふが、ユサリィといふ場合がある。これはよさりに通ずる語で、ようさり、ようさりがた、ゆふさりなどと同じく「夜」といふに同じである。

祖平花節の一節に

ユサリィユ　ヌ　サムン　ケン

といふのがある。直譯して見ると、「よさり夜の醒め果てるまで」といふことで、「夜の明けるまで」といふ意味である。

枕草紙に、「異木」、「異折」、「異所」、「こと人」、「異事」などの語があるが、「異」は他、別などの意味を有つてゐる。琉球語でもクトゥといふのである。

萬葉集卷十六に、「天爾有哉、神樂良能小野爾、茅草苅、草苅婆可爾鶉乎立毛（乎は之の誤かといふ）」といふ「怕物歌」がある。こゝの「かやかりばか」の「はか」は區切りせる所をいふのである。琉球では縱道に依つて區切られたる區劃内を「ハカ」といひ（横道の場合もいはないことはないが餘り必要がないから用ひない）、或は又うね（畦）列などにもいつてゐる。

物の一杯に足らざることを「ナカラ」といつてゐる。半、半分の義である。人名に半井があり、枕草紙に、「簾の中に半ばかり入りたれば」、「簾を押し入れて半入りたるやうなるも、」などがあり、萬葉集卷十六にも、「檀越也、然勿言、氏戸等我、課役徵者、汝毛半甘」といふ假字遣があり、その他半を用ひた所が澤山ある。半が五合であるに對して小半は二合五勺である。「ナカラーマ」を少量の意味に用ひるのと同じである。半の意義か

ら度量の狹くして怒り易き者をナカラ・ムヌ（牛者）といひ仲惡しきことをナカラサーン（牛さある）といつてゐる。

峯を「ニー」といふ。「ね」の轉化した語である。固有名詞に用ひた例では多良間嶺などがある。古典にも例證が多いが、一例を擧げると、古今集の甲斐の歌に、「甲斐が根をねこし、山こし、吹風を、人にもがもや、ことづてやらん」とある。

うき（浮子、泛子、浮標）を矢張り「ウキ」といふが、萬葉などではうけといつてある。

「ユス」は今日もいふ所のよそ（餘所、他所）で古くから用ひてゐる語である。

ツトッ即ちつと（苞苴）は本來藁で物を包み結いたものである。「暫しとて山井の清水むすびつゝ、乾飯のつとを取りぞ出でつる」のつともこれである。この意義が轉化して「土產」にも用ひられるのである。「をぐろ崎みつのこ島の人ならば、都のつとにいざといはましを」のつとは即ち土產の品物を意味してゐるのである。

背、後をクシィといふ。「こし」といふに同じである。シー（背）ともいふが、これは多く熟語として用ひられる。單に「クシィ」といふ時には脊中の意味に用ひてゐるが、「家の後」をいふ時にはヤー・ヌ・クシィ（やのこし）といふ。ヤー・ヌ・シンタ（家の背方）といへば前者よりも漠然とした言ひ方で、場所を明確に指示してゐない。こしのくに（越國）のこしもこの「クシィ」の意味であらうと思はれる。古事記に、「是高志之八俣遠呂智毎年來喫」とか又は、「八千矛神。將婚高志國之沼河比賣。幸行之時。」などとある。こゝの高志國は脊國即ち越國でないだらうか。シー（脊）を用ひた例を擧げると、シー・パン（脊脛＝後足）、シー・ヌ・ヤー（脊の家＝墓）、シー・ミチィ（脊道＝裏道）などがある。

金を「ク・ガニ」若くは「ク・ン・ガニ」といふこがね（黃金）といふことである。枕草紙に、「花の中より黃金の鈴かといみじく際やかに見えたるなごは」といつてある。水銀を「ミジィ・ン・ガニ」といふ。みづがね（水金）の義である。ク・ン・ガニ、ミジィ・ン・ガニの「ン」は音便に依るので、揚豆腐をアンギ・ドーフといひ、兎をウシャーンギィと發音するのと同じである。國語に於ても「侍る」を「はンべる」といひ、「せずば」を「せずンば」といつてゐる。

全體、悉皆を「ムール」といつてゐる。國語のもろ（諸）の義である。諸が接頭語として用ひられる前に矢張り一度は名詞として用ひられた時代があつたであらう。副詞の「まるで」といふ語は「諸で」即ち「全體として」の意義を含んでゐるやうに思はれる。

底即ち、「スク」は單に器物の下位ばかりをいふのではない。上下の關係でいつたやうに、横にも用ひてゐる。即ち山の入口に對して奥の方を矢張りスク（底）といつたのである。これに中底、極底（ンガは苦にして甚だしき意）などいふ區別名稱がある。萬葉の歌にも底を山の奥に用ひた例がある。

籾殼を「スクブ」といふ。古語のすくも（稽）の義である。今も藝州地方ではいふさうである。マイ・スクブ（米稽）、アー・スクブ（粟稽）などの感じから形を取つて鋸屑をキー・スクブ（木稽）といつてゐる。

（一二）

「ハブ」を琉球特產の蛇、即ち所謂飯匙倩であると解するのは誤りで、「ハブ」といふ語は蛇類の總稱として用ひられてゐる。所謂波布（飯匙倩）を「マー・パブ」といひ、眞蛇の義である。蝮（眞

蟲）といふに同じである。古語「へみ」、「ハミ」。

蝶を「パビル」といふ。羽のひらひら動く感じを有する語で、蛾を「ひびる」といふのと同じである。

きのこ（菌茸）を「ナバ」といふが、關西、九州邊でも現に「ナバ」といつてゐる。今日初めて出來た物でないのに、斯く同じ語を以て呼ぶのは甚だ興味が深い。

灸をヤッツァーといふ。やいと（燒所、灸點）の轉化した語である。もぐさ（艾）をヤッツァー・フチィ（灸點蓬）といふ。

驚くことを「ウバイ」といふが、おびえ（怯）の轉化で眠草をピイトゥ・ウバイ・フサ（人怯草）といふ。

休むこと、及び長上の眠らるゝことを「ユコーン」といふ。いこふ（憩）の意である。

石鹸を「サフン」といふのは、しやぼん（西語、Xabon. 佛語、Savon.）の轉である。

「カザ」は香氣にも臭氣にも用ひる。匂ふことであるから、香氣を「イー・カザ」（善い香）、臭氣を「ヤナ・カザ」（惡臭）といふ。

「フング」はほぐ、ほご、ほうぐ（反故）である。敬字の風が起つて村の各所にフンジュル（焚字爐）といふ石室を設け、路上に散亂する紙片をこゝに集めて燒いたのである。

汽笛を「ブラ」といふ。ほら（法螺）の義である。未だ汽船を見ざりし時代にあつては、專ら帆船にて島と島との間を相往來してゐたのである。當時の船は多く獨木刳舟で、碇も孔のある自然石を利用し、そして法螺貝を吹き鳴して舟の出入發着を報告してゐた。それ故、汽船時代に入つても尙ほ汽笛を「ブラ」といふのである。併し「ブラ」にはその音を表はしてゐる感じがある。ほらにもこの意義があらうと思ふ。笛聲を沖繩人は「ブー」

と聞くが、他府縣人は「ポー」と聞く。これからすると、法螺貝は合圖や警戒に用ひる物であつたがためにほらといふのでないだらうか。

猫の鳴聲も沖繩人はミャウと聞き、他府縣人はニャーと聞く。この相違からして各々の猫に對する名稱の相違を齎した。即ち沖繩ではマ行音でマヤー、八重山ではマヤといひ、他府縣ではネコといふ。マヤーには「ミャウと鳴くもの」の意味がある。ネコのコは愛稱のための接尾語であらう。猫（ネコ）の語源を寢子（ネコ）として、よく寢るからだといふのは餘り贊同することが出來ぬ。

（一三）

月日の勘定をするにも、一日をピイトゥ・イ（ひと・ひ）、二日をフチィカ（ふつ・か）、三日をミィー・カ（み・か）、十日をトゥッカ（とを・か）、十三日をトゥッカ・ミィーカ（とをかみか）、二十日をパチィカ（はつか）といふ。又數字の計算にも二十を「パタ」、六十を「ムス」、八十を「ヤス」、百を「ムム」などといふ。民謠にムス・ミー・アン、ヤス・ミー・アンといふ語がある。六十目網（むそめあみ）、八十目網（やそめあみ）で、目の細かく澤山ある網といふことである。百回をムムッ・ケーラといふ。尙ほ一寸は食指の先端から二節目の長さをいひ、これをピイトゥ・ブシィ（ひとふし、一節）といつた。拇指と食指とを充分に張つた長さを五寸とし、兩手を左右に伸した長さを一尋（ひろ）とした。長さを測定する單位としてこれ等を日常用ひたのである。

家を勘定するに「キブリィ」といふ語を用ひてゐる。けむり（煙）といふ意味である。竈から立ち上る煙の數に依つて民家の數を知るのである。高麗の好太王の碑文にも見えてゐる。仁德天皇が「於國滿烟」と仰せられたことに照して見ても古風俗が窺はれる。

紙、布、蓆のやうな薄い物を計算するにはヒラ（約してイラ）を用ひる。例へば、シィスカビィ・ピイトゥイラ（白紙一枚）、ムス・フタイラ（莚二枚）の如きである。枕草紙に、「いと艶やかなる板の端近う、あざやかなる疊一ひらかりそめに打敷きて」、とあり、又河内に枚方、枚岡郷、枚岡神社、播磨に枚方、枚野、薩摩に枚聞神社、備前に枚石郷、伊勢に枚田郷、但馬にも枚田郷、土佐にも枚田郷、越前に枚井出などの地名がある。

明治二十年前後まで金錢といふ物を知らず、物々交換であつたがために、言語にも其の社會相が閃見えてゐる。五錢を「イッシュジン」即ち一升錢といつてゐた。當時米一升が五錢であつたからである。從つて五厘を「イチィンゴー・ジン」、（一合錢）、五十錢を「イットゥジン」（一斗錢）といつたのである。明治の聖德遍き中期に於てさへ尙ほ且つ然りであるから、維新前數百歲の彼等の生活は全く外部から煩はさるることなく、恰も現世を倦める隱者が絕海に樂土を求めて閑居せるが如く、純眞無垢に過して來たのである。其の半面には又神代ながらの醇俗を髣髴せしむるものがあり、言語の如きも內部的自然の變化はあつても、外界から影響せられることは極めて尠かつた。

「カウン」即ち「買ふ」といふ言葉はあつても、賣るに相當する言葉はない。强いていへば買ふを活用させた買はずに相當する「カーシィン」を用ひるのである。これは從來交易本位の取引をして來た爲めであらう。「買ふ」の語源も大抵「易ふ」即ち物を取替へる意味であらうと思はれる。勿論原始時代の人間は自己本位の物であるから、物を自分の方へ取入れる買ふといふ語が先に出來、賣るは後から出來たのである。これと同樣に「借る」に相當する「カルン」といふ語はあつても「貸す」に相當する語はない。强ひて言つて矢張りカルン

（借る）を活用させてカラシィン（借らす）といふのである。これも自己を標準として成立つてゐる。

（一四）

自己を稱するに「バヌ」、相手を稱するに「ワヌ」といふが、時には單に「バ」、「ワ」を用ひることがある。例へばバン・ダー（我達）、バー・ムヌ（我物）、バン・チャー（我家）、ワ・ダー（汝達）、ワー・ムヌ（汝物）、ワッ・チャー（汝家）の如きである。同樣にたれ（誰）は「タ」又は「タル」といふ。例へば、タッ・ター（誰達）、ター・ムヌ（誰物）、タッ・チャー（誰家）などである。奴（やつ）を「ンザ」といふがこれを附けて見ると、ワ・ンザ（汝奴）、タ・ンザ（誰奴）となる。尙ほ又他人を稱するに直接いはずに、間接に、指す場合には、「ナラ」といふ。これも語根は「ナ」である。「ナ・ンザ」（汝奴）で見ても分る。右のバ（我）、ワ（汝）、タ（誰）、ナ（汝）は古い言ひ方である。彼（かれ）は「カリ」といふが大抵ウリ（其（それ））と混同して用ひられる。又近い所はクマ（此處）、遠い所はカマ（彼處）、其の中間をウマ（其處）といふ。「マ」は間（ま）で場所を意味する。尙ほ例を擧げて見るならば地名に、伊原間（イバルマ）、鳩間（バトマ）、波照間（テルマ）、長間（ナーマ）、仲間（ナカマ）、嘉彌間（カヤマ）などがある。これから考へると島（シマ）のマ、山（ヤマ）のマ、濱（ハマ）のマも皆同じく場所を指示するものであると思ふ。時間的に考へても同樣で、暇（ヒマ）のマは間隙を意味するのであらう。島（シマ）のシは磯城（シキ）のシ、塞（ソコ）のソ（コは處）、磯（イソ）のソ、砂（スナ）のスなどと同義であらう。又山（ヤマ）は草木繁茂せる所、濱（ハマ）は廣き所といふ意味でなからうか。

尙ほ「マ」は接頭語に用ひて眞實を意味する場合がある。例へばマー・ムティ――マ・ウムティ（眞表、正面）、マー・ピィローマ（眞晝間、正午）、マー・ムスビィ（眞結）などがそれである。

落窪物語に、「我君のおはしますケなりといへば」とある。こゝの「ケ」は古語のけ（故）で、古事記に、賜二天沼矛一而。言依賜也。故二柱神立二天浮橋一而。」とある所のカレ（故）の轉化したものでなからうか。八重山語では「キー」といふ。「け」が「キー」であることは、毛を「キー」といひ、手を「ティー」といひ、目を「ミー」といふのでも分る。

古語で麻を「そ」といひ、青麻、綜麻などと熟語にのみ用ひられてゐる。八重山でもス・ブ・マル（麻苧丸、神に供る麻）、ス・クイ（麻笥、婦人の麻を績みためる器）などといふ。他動詞のソングン（そびく）も麻引くであるといふ説がある。

古語に物を容れる器の總稱として「け」といふ語がある。バーキ（口の開いた笊）、ソーギ（しようけ、箕）、ウキ（桶）、カイ（又はクイ）（衣笥、長持に相當するもの）、バク（箱）、コー・バグ（香匣）クリ・ブグ（梱、葛籠）、ス・クイ（麻笥）クシィ・キィ（層笥、甑）など澤山ある。

新年をミィー・トゥシィ、新米をミィー・マイ、新物をミィー・ムヌ、新月をミィー・チィキィ。これ等に於けるミィーは「にひ」で、新しき意味で他の語に冠するものである。稀に形容詞としてミィーサーンといふ。「にひさある」の義で、「新し」といふことである。

マタ（又）を重ねる、繰返す、改めるの意味で他の語に冠した例を二三擧げて見ると、マタ・ウトゥザ（又親類＝外戚）、マタ・イチフ（又いとこ＝再從兄弟）、マタ・マー（又孫＝曾孫）、マタ・バイ（又生え＝蘖）、マタ・プー（又穗＝穭穗）、マタ・カザミ（又藏め＝改葬）などがある。

（一五）

古語に「あゆ」といふ語がある。枕草紙に、「す

ずろに汗あゆる心地ぞしける」といつてゐる。八重山ではアイン（あゆ）アイルン（あゆの口語形に相當する語、あえる）となつてゐる。腫物などから膿汁の出ることや、木の實などが枝から離れ落ちることなどにいふ。又他動詞としてはアーシィンとなつてゐる。「あやす」といふことである。竿などで木の實を叩き散したり、腫物を押潰したり或は顎を外す（カクジィ、アーシィン）ことなどにもいつてゐる。

食物に一向ありつかぬことを「カチィリン」といふ。即ち古語かつるで、「糧飢ゑる」の義であらう。その口語形に相當する語が「カチィリルン」である。かつれるに當る。

衣物を着ることを古語で、けすといひ、その名詞法がみけし（御衣）である。「君が美家思し、あやに着欲しも」、「君が御衣に縫ひあへむかも」、といつてある。八重山では「キスン」といふがけすの意味であらう。

「顏を洗ふ」を「ウムティ・シィミン」といひ、「手足を洗ふ」を「ティー・パン・シィミン」といふ。「ウムティ」はおもて（表。面）で顏、「シィミン」は洗ひ清むること。古事記傳に「清洗須麻志上と訓べし、洗ひ清むるを須麻須」といつてゐる。但しこの語が洗ふ（アーローン）と違ふ點は、洗ふは單に有形の汚を水にて去る動作であるが、「シィミン」はこれ以上無形の不淨をも洗ひ去る意味がある。その口語形は「シィミルン」である。

敲く、擲る、拉ぐの意味に「シィタグン」といふ語がある。古語しだくである。

古語にすぐる（選）といふ語がある。八重山でも選擧運動などをなすことを「スグルン」といつてゐた。

熱病などに冒されてうん〳〵唸ることを「タキルン」といふが、古語に、たけぶ（哮）といふ語

がある。これと關係がないだらうか。

貴人若くは長上より物を與へらるゝを「タボールン」といふ。古語たばる（賜）の義である。

彩色を施すことを古語だむ、八重山語「ダムン」べと〳〵に塗りつけ、若くは擲書きすることを「ダンクラシィン」といふ。

探し求めることを古語でとむ、八重山語で「トゥミン」。その口語法「トゥミルン」（とめる）。探して來るを「トゥメー・キィン」（古語とめく、尋來）。拾得物を「トゥミ・ムヌ」（とめもの、求物）。

「ユムン」は讀む以外に語る、數ふの意味もあり。「讀めば我年今幾つ」、といひ、又ムニ・ユン・チャーは言讀手で、饒舌なることをいふ。

バイン、バイルンは延ふ、延へるで、繩などを地上に引張ることをいふ。

「ヤルン」は古語やる（破）、自動詞にしてヤリン（破る）、その口語形としてヤリルン（破れる）。ヤリ・キィン（破れ衣）、ヤリ・カコー（やれかかふ、破幣、襤褸衣）。何れも古語である。

トゥユムン（とよむ）。鳴り響く。轟き渡る。「豐む」と記せり。「白浪散動」、「雉子は登與牟」。

しをる（萎）をナィン（なゆ）、「しをれる」をナイルンといふ。

果實の熟し、腫物の膿を生ずることをウムンといふ。

苧麻、芭蕉糸などを細く析きて長く縒ることをウムン（績む）といふ。

擴がり開くことをパタガルン（はだかる。開張）といふ。「目口もハダカりて覺ゆ」。股の開きたる者を卑下してマタ・パタガレー（股のはだかれる者）といふ。

湯にて腫物などを蒸しあたゝめることを「タディィン」といふ。國語ではたでるといつてゐるが、たでるは八重山語では「タディルン」で、タダイ

ンの口語形に當る語である。それ故に國語でもタディンに相當するたづといふ語があつたらうと思はれる。これ恰もすてる（捨、シティルン）に對してすつ（捨、シティン）のあるやうなものである。又、佩く（パクン）は輪になつた物に頭を通して首に懸けることで、轉じて辨償する意味にも用ひられる。本來からいへば輪に物を通して身に附けることであらう。

物を擔ぐことを「カタミン」、「カタミルン」といふが、肩む、肩めるの義である。これ恰も孕むが腹むであるやうなものである。

「生ゆ」をムイン（萌ゆ）、「生える」をムイルン（萌える）といひ、他動詞「生やす」はモーシィン（萌やす）である。又生立つをフドゥビン（潤ぶ）、フドゥビルン（潤べる）といひ、「成長さす」をフドゥバシィン（潤ばす）といつてゐる。

怒るをクンジョー・イディンといふが、「根性出づ」の義である。他動詞にしてクシジョー・イダシィン（根情出す、怒らす）といふ。言ひ合ひ即ち口論をムンドーといひ、問答の義で、內曲揉をヤー・ムンドー（家問答）といつてゐる。

新芽をバイといひ、生えの義である。蘖のばえも恐らくこの意味であらう。又芽をフキィといふ。莖の轉化である。

つばな（チィバナ）は茅の花であるべきき筈のものが、八重山では茅の根から吹き出す針の如き新芽をいつてゐる。そして本來の茅の花を「ガヤ・ヌ・パナ」といつてゐる。

（一六）

以上の大體の比較に依つて琉球語が我が古代語と密接なる關係を有するものであることが明かであらう。否琉球は我が古代語を保存するために、久しく南海僻陬に別天地を設けてゐたやうな觀があ

る。併し時代は一轉して今日は種々の學藝、産業が勃然として興り、從つて天涯到らざる所なく、外客又殺到し、人智も灼然として闢け、新智識の獲得に日も足らざる有樣である。それ故、言語の如きも自然漸く其の舊態を失はんとしてゐる。今の中に之が集錄を急がねば、十年を出でずして悔いを招くであらう。予は淺學到底この重任に當る者でないけれども、斯く滅び行く貴重なる言語資料を失ふに忍びず、微力を顧みずしてこれが蒐集、研究に從ふ者である。この些細なる研究が將來の環境諸國語との比較研究に如何なる影響を及ぼすものであるかは、餘程興味深き問題である。

宮良當壯